

# 第6回 第5次市民自治推進会議

## 会 議 録

日 時：2024年8月7日（水）午後6時00分開会  
場 所：札幌市役所本庁舎 12階 4・5号会議室

## 1. 開 会

○事務局（藤田推進係長） 山崎委員から遅参するという話は伺っていますし、お時間となりましたので、第6回第5次市民自治推進会議を開催したいと思います。

事務局の藤田です。よろしくお願いいたします。

それでは、お手元の次第に沿って進めたいと思います。

次第1の議事からは鈴木座長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 2. 議 事

○鈴木座長 皆様、お疲れさまでございます。

慣例に従いまして、私が次第に沿って進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

前回の5月29日開催の第5回の会議におきましては、成人の日行事をモデルとした実験のねらい、また、現状の市民参加の手法について皆様にご議論をいただきました。

本日は、前回の議論を踏まえまして、最初に、（1）にございますように、成人の日行事に関するアンケート調査結果の概要等について議論を行ってまいります。

それでは、事務局より資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） A4判横の資料になっておりますが、議題の（1）に関しましては、1ページから10ページまでが該当のページとなります。

前半は市民に対して行ったアンケート結果の概要、後半は地域にヒアリング調査を行った結果の概要や論点の整理という構成です。

まず、1ページをご覧ください。

成人の日行事に関するアンケート調査結果の概要についてです。

本アンケート調査は、この会議体が扱っている市民参加の仕組みづくりの検討に生かすために、既存の調査手法などを用いまして、手法ごとの利用率や利用者の属性、回答内容の差異を検証する実験の一環として行ったものであります。テーマとしては、成人の日行事、いわゆる札幌市における成人式のあり方を扱っております。

期間は、令和6年5月22日から6月14日と設定しております。

回答に当たりましては、予備知識として、市内の成人式は各区の地域の方々が中心となって主催されていること、会場や人員の確保、財政面に課題を抱えている地域があること、行政から補助金が出されていること、そして、近年の成人式の実施状況などの情報をお伝えした上でご回答をいただいております。

対象は、表の左側に区分として示しておりますが、3つございまして、まず、住民基本台帳から無作為抽出した19歳の市民3,000人、それから、市内4校の大学の学生約470人、そして、その他一般市民を対象としてオンライン調査を行っております。

なお、オンライン調査に関しては、札幌市の公式LINEを通じて通知を受信できる環境にあった方が約12万人、そして、市のXのフォロワーが約13万人となっておりますので、

参考にお伝えをいたします。

回答数は黄緑色の回答者属性のところの合計の欄をご覧くださいただければと思うのですが、19歳の区分が557件、大学生の区分が371件、その他の区分が5,103件で、合計6,031件の回答となっています。

続いて、右のオレンジ色の回答数の欄ですが、回答方法ごとの回答数を示しています。

最も多く利用されましたのはオンライン調査におけるLINEでして、その回答が4,736件という数字になってございます。

最後に、一番右の回答率に関してですが、19歳の区分では18.6%、大学生では約79%となっております。

次に、2ページをご覧ください。

こちらには回答者の属性をまとめております。

一番左のグラフは全回答者の年代を示しておりますが、10代と30代から50代の回答が多いことが分かると思います。

10代に関しましては、無作為抽出の19歳の区分の回答がここに含まれておりますので、必然的に多くなっております。一方で、30代から50代に関しては全てオンライン調査による回答となっております。

テーマによるかもしれませんが、少なくとも、札幌市として、特に現役世代の方々から回答を得たいというときにはオンライン調査を試みる必要があるのではないかと考えます。

続きまして、真ん中のグラフですが、こちらは居住地を示しているものです。

北区が最も多い回答となっております。逆に、清田区が最も少ない結果となっております。これは、実際の区の人口と比べ、大体一致する結果です。

最後に、右のグラフですけれども、全回答者の性別を示しております。

全ての調査区分において、女性が多い結果となっております。割合にすると、全体で男性が約36%、女性が約63%、その他が1%となっております。

ページをおめくりいただきまして、3ページでございます。

こちらは、回答方法などをまとめております。

左のグラフですが、こちらが19歳と大学生の区分の回答方法になります。

まず、19歳の区分の方には調査票を郵送いたしまして、その調査票による回答かオンラインによる回答を自由に選んでいただいておりますが、結果としまして、オンラインが約6割、紙が4割となっております。

それから、大学生に関しましては、当会議の委員の方々に授業の中で紙の調査票を配付していただいております。オンラインも選択できるのですけれども、やや特殊な条件下だったということもあるかは存じますが、紙が56%、オンラインが44%という結果となっております。ご協力をいただいた委員の皆様にはこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

次に、真ん中と右のグラフです。

これは、オンライン調査を知ったきっかけと回答方法を示しております。真ん中が入り口、きっかけで、右が出口、回答方法となりますが、いずれも9割がLINEを通じて回答をいただいているということです。

特徴的なのは、世代ごとに見たときに、一番左側の10代以下のグラフに特徴がありまして、ほかの世代と比べますと、濃いグレーのXの割合とその上のオレンジ色のその他の割合がほかの世代より高いという結果になっております。

その他の割合が高いところとしましては、親や家族から教えてもらったという方がほとんどで、お子さんに回答を勧められたご両親が多かったのだろうと推測いたします。

また、右の回答方法に関しましても、10代以下においてはスマート申請での回答の割合がほかの世代よりも高くなっております。こちらも推測にはなりますが、10代以下の方は市の公式LINEに登録をしていないという方が恐らく多く、ご家族などから勧められ、ホームページを経由してスマート申請を選択されたということなのかもしれないと思っております。

ちなみに、ホームページ上の案内としましては、左側でスマート申請のご案内をしております、右側にLINEの案内というような配置にしておりましたので、もしかすると左側のスマート申請を選ぶ方が多かったのかもしれないと。

いずれにしても、結果としては、オンライン調査の際には、まずはLINEの活用が効果的であろうということが言えると思います。

さらに多くの属性の方からの意見を把握するためには、LINEだけではなく、ホームページやXでの周知、それから、LINEを利用していない方などのことを考慮し、スマート申請など、別の回答方法も用意しておくといえそうです。

ページをおめくりいただきまして、次にオンライン調査の日時集計の結果を記してございます。

一番左側の5月22日の水曜日の13時に通知をしましたが、この日のうちに3,000件を超える回答を得られています。その後、少しずつ増えておりましたが、改めて6月8日の土曜日の13時に再通知を行いました結果、その日は1,315件の回答を得られました。再通知のねらいは、もしかしたら平日に回答をいただけていなかった、気づかなかった方でも、土曜日、お休みの日などであればご回答をいただけるのではないかとということです。

この結果からは、素早く回答を得ることができる一方、継続的にまとまった数の回答を得ることは難しいのかなと考えております。すなわち、短期間で傾向をつかむということには適しているのかなということが言えると思います。

ページをおめくりいただきまして、5ページです。

こちらは、アンケートの調査にご協力をいただいた理由についての回答結果で、複数選択式の回答となっております。

上から回答が多かった選択肢を順番に並べておりますが、一番多かったのは、アプリで通知があり、興味を持ったからというもので、全体で5割近い方がこれを選んでおります。

以降、自分の意見を札幌市に伝える機会が普段はないから、回答にそれほど手間がかからないから、もっとよいイベントにしたいからという順番で、これらで全体の2割以上という結果になっております。

これらの結果から、アプリで通知をすることと回答の手軽さが回答につながっていると思われます。また、背景として、普段は市に意見を伝える機会がないという方が一定数いることも分かりましたので、オンライン調査に関しましては、普段市政に対して意見を言う機会がないと感じていらっしゃる方からも意見をお聞きすることができるためには有効なツールであろうと考えられまして、サイレントマジョリティーの掘り起こしという点においても一定の効果が見込まれるものなのではないかと考えます。

それから、この表において世代を比較した特徴を幾つか挙げますと、理由の上から3つ目に回答にそれほど手間がかからないからというものがございまして。この回答に関しましては、10代がかなり低い割合で、12.2%という結果になっております。もしかすると、10代の方は、普段からアプリの利用などに慣れていて、逆にこういったアプリを通じて回答することが普通の感覚であったのかなと推測しているところです。

また、その2つ下の身近な話題であるからという回答に関しましては、10代以下が当然最も多いのですけれども、一方で、40代や50代の世代も2割以上という結果になっております。恐らく、自分が当事者ではなくても、子どものイベントとしてご興味があれば、それを自分事と捉えられて、回答につながる要素になったのではないかと考えます。

ここまで主に属性や手法などに関してご報告をいたしました。次からは成人式に対する各世代の考え方についてご紹介をしたいと思います。

ページをおめくりいただきまして、6ページをご覧ください。

こちらは、物価高騰など、様々な背景によって地域が式を主体となって実施することが困難になるおそれがあることについて思ったことを選んでいただいたという結果を示してございまして、複数回答になっています。

グラフが2つありまして、左側が19歳以下の回答結果であります。

最も多いのが引き続き地域から祝ってほしいという回答で、次に行政が主体となるべきという回答になっております。

この2つを見たとき、右側のグラフが20代以上の回答ですが、20代と70代に関しては地域で祝ってあげるべきという回答が多い一方、それ以外の世代は行政が主体となるべきという回答が多くなっているということが分かります。

この点は、世代間において考え方が異なり、それから、地域と行政との役割分担、パートナーシップに関わることでありまして、明確な答えもありません。しかし、今回議論するに当たっては一つの論点になり得るのかなと考えております。

ページをおめくりいただきまして、7ページでございまして。

こちらは、今後の開催方法として希望するもの、つまり、区ごとに開催するのがよいか、合同開催するのがよいかという問いに関する回答結果を示しております。

一番左のグラフが全世代の回答になります。

結果として、30代から50代の現役世代は回答が同程度で割れておりますけれども、その他は区ごとの開催を希望する意見が多くなっております。

次に、特徴的なグラフが右から2つ目の合同開催を希望した理由です。

若い方と申しますか、10代などには、多くの友人に会えるから、記念になるからということを中心されている傾向が見られますが、逆に、年齢が高くなるにつれてそういった傾向は下がっていくということが見受けられます。そして、黒色の上、濃いグレーの運営の効率がよくなるからという選択肢に関しましては、逆に、年齢が高くなるにつれて運営の効率を重視されているということが分かりまして、運営側の視点を考慮するような傾向が見られております。

そして、一番右に居住区別の回答を示しております。

中央区と豊平区においては合同開催の意見が多い結果になっております。一方で、厚別区、清田区、手稲区においては区ごとの開催を希望する意見が多くなっております。豊平区に関して言えば、札幌ドームのことを考慮されてのお答えなのかなと推測するところで、小規模区に関しては、逆に札幌ドームからは遠いというようなことがこの結果につながっているものと推測されます。

このように、開催方法についても世代間や居住区によって考え方が異なることが分かっておりまして、これも一つの論点になり得ると考えております。

次に、ページをおめぐりいただきまして、運営資金の確保をどのように行うのがよいと思うかという質問に対する回答結果を示しておりまして、こちらも複数回答になります。

いずれの年代でも、最も多いのは限られた運営資金でできることを実施するべきという回答です。それから、年代ごとに比較しますと、10代から30代の若い方は、クラウドファンディングなどの大規模な寄附や地元企業からの寄附を求める声が多く、年齢が高くなるにつれてそれらの割合が低くなっていることが分かります。また、行政からの補助を増やすべきという意見、黒色の右側の濃いグレーの棒グラフに着目しますと、年齢が高くなるにつれて低くなっていくような傾向が見られます。

この点についても、世代間で考え方が分かれておりまして、かつ、明確な答えもありませんので、議論における論点になり得ると考えております。

アンケート結果の概要につきましては以上です。

次に、9ページをご覧ください。

成人の日行事に携わる地域の方へヒアリングした結果の概要を記載してございます。

このヒアリング調査につきましては、5月から7月にかけて各区の実施委員会の構成団体の計14団体に対して課題などの聞き取りを行ったものであります。

対象の団体は主に各区の青少年育成委員会の方々で、区によっては連合町内会や保護司会を対象に実施いたしております。

表の左にあります3つの質問項目に基づいて各団体に質問をいたしましたので、い

いただいた意見も3つに分類をしております。本当に様々な意見を直接お聞かせいただきましたが、全てをご紹介し切ることが難しいので、各区で共通していた表の真ん中の主な意見について触れさせていただきます。

一番上は、成人式の必要性和主催者としてのやりがいについてです。

主な意見としては、人生の節目として成人の日行事は必要である、参加者が楽しそうにしている姿を見るのは自分たちにとっても喜びであるし、親にとっても楽しみの一つであろうということ、そして、地域として祝ってあげたいという思いがあるということです。

次に、現状の課題についてです。

主な意見といたしましては、企業から協賛金を集めているけれども、将来的に協賛を継続してもらえるのかは不透明である、昨今の物価高騰の影響などもありまして、人件費や会場代も増えている、その分を行政からの補助金額として反映してもらいたいけれども、増額してもらえていない、そして、最後は、従事者の方が高齢化をされており、丸一日、従事することは体力的に難しい面がある、若い方の成り手もない状況だということがありました。

最後に、市への要望であります。

主な意見として、余裕を持った運営を行うため、市からの補助金を増やしてほしいということが共通の意見として伺ったものであります。

まとめますと、地域としては、これまでどおり、若者の門出を祝ってあげたいというお気持ちはおありなのだろうと思いますが、一方で、予算確保について課題があり、補助金の増額を希望される地域が多かったところです。

最後に、10ページをご覧ください。

アンケートの結果やヒアリング結果を踏まえ、成人式に関する論点を3つに絞って整理をしております。

論点としては、実施主体、財政、会場の問題です。そして、横軸は、立場として、地域のスタンス、19歳以下のスタンス、20歳以上のスタンスというようなまとめ方をさせていただいております。

まず、一番上の実施主体についてです。引き続き地域が主催すべきか、あるいは、行政が主体となるべきかではありますが、地域としては地域で祝ってあげたい、19歳以下のご回答の傾向を見ると地域に祝ってほしい、そして、20歳以上の方のお考えは割れているということで、地域と行政が同程度という状況でした。

次に、中段の財政に関してです。

地域からは補助金の増額を希望する声が多いということが分かっておりますが、一方で、市民の方のうち、若い世代である20歳以上の方々は、補助金の増額といったことも含めて、世代によって考え方が若干異なっております。

最後に、会場についてですが、地域と19歳以下の方のお考えによれば、各区での開催を希望されているという傾向にあります。一方で、20歳以上の方々については、各区での合

同開催と意見が割れている状況であるという整理をさせていただいております。

以上が議論の前段で必要となる情報を我々で収集し、整理させていただいたものでございます。アンケートの対象者や地域の方々にもこれらの結果をしっかりとお知らせしてまいりますし、今後予定している議論の場においても、これらの情報を十分に活用し、参加者に対して丁寧に情報提供をしてみたいと考えております。

○鈴木座長 ただいま成人の日行事に関するアンケート調査結果の概要等についてご説明いただきました。ただいまのご説明に関しまして、皆様からご意見やご質問等がございましたら、よろしく願いいたします。お気づきの点やご感想でも結構ですので、よろしく願いいたします。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 事前に資料をいただいていた、衝撃を受けたのが3ページのところです。

今回の話からそれるかもしれないのですが、オンライン調査を知ったきっかけのグラフについては、10代以下の方もホームページで知ったきっかけが0%なのですね。要は、1%にも満たないという意味だと思うのですが、個人的にはこれに結構な衝撃を受けました。今の人は情報を収集するのにホームページをあまり見ていないのかなと見えました。

一昔前に新聞からテレビに移って、テレビからネットに移ってと情報の収集の仕方が変わってきていると思うのですけれども、今、若い人はホームページを見るということもないのでしょうか。本当に必要があって、飲食店の情報などは見るとは思うのですけれども、昔で言うネットサーフィンのような情報収集の仕方すらもうしていないのではないのかなというところにちょっとびっくりしました。

例えば、行政として情報を発信していく、市民の皆さんに情報をお伝えしていくというとき、ホームページで出すだけでは全く足りないのだろうなと感じました。

○鈴木座長 私もそれは感じておりました。何か目的があれば、多分、ホームページで調べられると思うのですけれども、斎藤部長もおっしゃっていたように、ネットサーフィンをするということなどは、最近、ちょっと少なくなっているのかなという印象を受けました。

大学のホームページもやはり同様でして、何かの目的があれば多分見に来るとは思うのですけれども、最近ではSNSからの誘導ではないのですけれども、その中でウェブに推移するといった行動が多くなってきているような気がしています。ですから、今後、情報発信といいますか、どう情報を伝えていくのかに関しては少し議論が必要なのかもしれません。

また、私の気づきではあるのですけれども、5ページのアンケート調査に協力した理由があります。年代別に階層がありまして、その理由が書いてありますけれども、10代に着目しますと、アプリで通知があり、興味を持ったからというのは、20代から50代は非常に多いのですけれども、アンケート調査の回答率から考えますと、10代というのは32.6%と非常に高い数字になっております。このアプリで興味を持つというのも10代の特徴かなと思っています。

また、自分の意見を札幌市に伝える機会が普段はないからというのも30代から60代が比



較的高いですがけれども、10代もそれに比較しまして非常に高いのです。やはり、SNSなどで発信することによって札幌市とか行政に意見を伝える、それが促されるといいますか、そういうきっかけになるのかなという印象を受けております。

また、もっとよいイベントにしたい、身近な話題や大事なイベントというのはテーマに帰ることが多いと思うのですがけれども、その下にあります自分の意見を参考にしてもらいたいというものです。これも意見を出したいということだと思っておりますけれども、他の年代に比較し、非常に高いのです。これは、今回のSNSも含め、仕組みづくりの中で効果が少し見えてきたのかなというような気がしています。

アンケートに義務感を感じたからというのは、年代が高くなるにつれ、比較的高くなっているということはあると思いますが、あまり感じていないのです。それに比較して、先ほど申し上げたとおり、アプリやSNSがきっかけとなってという数字が高いということもありますので、SNSの効果は比較的大きいのかなということが証明されたのかなと思います。

そのほかにいかがでしょうか。

○梶井委員 先ほどのご説明にもあったのですが、4ページのオンライン調査のことです。ホームページまで情報を取りに来ないというご意見もありましたが、情報に触れるタイミングが重要で、そのときにはぱっと反応するけれども、その後はほとんど伸びないということがわかります。

いつ発信するかというタイミングがすごく重要なのだなと改めて思いました。

○鈴木座長 曜日や時間帯もあるのかもかもしれません。

私は若者ではありませんけれども、SNSですと、通知があったときはちょっと考えますけれども、時間がたつにつれて忘れるといいますか、意識から遠のいてしまうというのは事実ですので、タイミングを考えていくというのは重要かなと思っています。

そのほかに何かございませんか。

○三上委員 気づいた点です。5ページが我々のやったアンケートの傾向といいますか、いいものが出ているかなと思ったところです。

2つありまして、一つはもっとよいイベントにしたいからということについてですが、70代が1番ですがけれども、10代が2番手に来ているのですよね。10代の方、そして、そうした10代の孫を持っている方なのでしょう。10代が多いのは自分事だからだと思っておりますけれども、70代というのは、自分の孫としての自分事という意味があるからなのかなと思いました。

また、10代のところの縦で見ると、身近な話題である、そして、自分にとって大切である、そして、もっとよいイベントにしたい、だから自分の意見を参考にしてもらいたいということで、全て自分事として響いたということですね。19歳の方々がそう思ったということだと思っておりますが、そういう人たちが自分の意見を札幌市に伝える機会が普段はないということで、もしかするとこの人たちがはまってしまう可能性があるわけですね。

自分事から市政に興味を持って、市に何か言ったら届くのではないか、しかも手軽だからということ。ですから、今後、各世代の身近で大事なことから入って行って、次の質問でさらに違う市政に関心を持ってもらう、そうした入り口になる可能性が非常に高いのかなと思いました。

オンラインでの2回か3回やるシリーズでは、最初に自分事にしてもらって、大事にってもらって、次に変化球的に別なことも聞いてみると、サイレントマジョリティーの掘り起こしができるのかなと思いました。

○鈴木座長 フェーズをつくるといいますか、入り口を設け、そこから入ってきていただくということですね。どういうプロセスとするのか、いい仕組みづくりにつながるかもしれません。

そのほかにいかがでしょうか。

○事務局（川村市民自治推進課長） 行政側の視点というか、我々が思ったこともお話ししたいなと思います。

我々行政は、今まで、市民の声を聞くというか、どんなお考えを持っているかについて、聞くのは結構難しいな、時間が結構かかるなという思いがあったのですが、オンラインでの簡単な方法を通じてやることによって、現在、市民がどう感じているのかを簡単に、気軽に聞けるものだという気づきがありました。

こういうものを活用し、例えば、今、こういうことをこれから検討していこうと思っている、あるいは、検討している方向性についてどう思うかということも随時確認する、これだけ気軽に聞けるのであれば、そういうふうに活用していくことも今後是可以なのかなという思いを持ちました。

○鈴木座長 行政の視点での思いといいますか、ご感想をありがとうございました。

今、若い人からの意見といいますか、気軽に入りやすい、答えやすい、意見が反映されるなど、いろいろと気づきがありましたけれども、大村委員、ご自分に照らしてお話をいただければと思います。

○大村委員 多分、LINEの通知などに反応できるというのはすごくいいと思うのですが、やっぱり、その瞬間だけということはあるかと思います。日常の中でいろいろな情報が常に来ますよね。自分でネットサーフィンなどで調べていくというより、自分に合った情報がカスタマイズされて集まってくるような仕組みが今はもうできているので、その中でどうやって市政に興味を持ってもらい、その後も継続的に興味や関心を持ってもらえるかを考えないといけないのかなと思いました。

○鈴木座長 ありがとうございます。

片山委員、何かお気づきになったことやコメントがございましたらお願いいたします。

○片山委員 意外と世代による差がなかったのですね。LINEに反応できる60代や70代が主に回答しているからそんなに差がなかったのかなという気もしますが、そこが私としては面白かったです。

○鈴木座長 40代、50代、60代でもスムーズに使えている方が回答したと思いますので、そういったバイアスもあるかもしれません。

そのほかに何かございませんか。

山崎委員はお越しをいただいたばかりでなかなか難しいかと思えますけれども、何かコメントがございましたらお願いします。

○山崎委員 授業で学生にフィードバックすることができました。事務局の皆様、まとめていただいて、ありがとうございます。

それを拝見したところで言うと、まず、成人式に参加したいかですが、私の予想を大きく裏切って、参加したいといえますか、祝ってもらいたい人がこんなにいるのだと感じましたし、サイレントマジョリティーが分かったということが私にとっての大きな発見であり、こうしたアンケートをやったことの意義があったところだなと思いました。

もう一つ面白かったのは、当事者意識があるかどうかは別にしても、これから様々な財政的な制約が出てくるといえるとき、限られた運営資金の中でやっていくべきだ、あるいは、様々な形で資金調達をしていくなど、行政が丸抱えで税金をどんどん出してやってくださいというような意見はどちらかというと少数だったということです。これも意外に思ったところで、サイレントマジョリティーの意向を認識できた本当にいい機会でした。

次に、このアンケートをこれからどう使っていくのかで、アンケートとはちょっと切り離されるものなのでしょうけれども、議論に参加したいかについてで、やってみたい、参加したいというところにはすぐにジャンプしないのかな、これが現実的な回答なのかなと感じました。

ただ、積極的に読み込むと、2割前後の回答者が、都合が合えば参加してみたいよと答えているのですよね。少ないけれども、劇的に少なくなかった、少数だけれども、一定数あったということで、今後のこうした活動をポジティブにやっていくとき、もう少し積極的に評価し、読み込んでいく余地があるのかなと思いましたし、今回、アンケート調査を行い、まとめていただいた意義のあることかなと思いますし、繰り返しになりますけれども、今回、サイレントマジョリティーの意向が浮かび上がり、把握できたということでは大いに意義があるアンケートであったと受け止めました。

○鈴木座長 ありがとうございます。

野田委員、ご感想等も含め、何かございませんか。

○野田委員 割と数字が好きなので、細かいといえますか、言われると嫌だろうなと思うようなことも言ってしまいそうですが、お話しします。

まず、感想ですが、やっぱり、5ページが面白いなと思いました。座長もおっしゃられましたとおり、自分の意見を札幌市に伝える機会が普段はないからというところですか。要するに、行政に対して意見を言いたいというのは参加したいということの表れだと思います。それが、各年代の中で2番目に来ているというのはいいですね。選択肢にレベル感はいろいろとあるのですけれども、その中で分けた上でも上から2番目になっていまして、

結構面白いなと思いました。良識ある札幌市民の自立性みたいなものがかいま見えるような気がしました。

それから、あとは、構成団体のヒアリングの結果についてです。やりがいに関わる話や現状の課題も、皆さん、ご自身のこととしてきっちり把握されていて、何か、地域力みたいなものが見えるなと思う反面、その他の意見なので、多いわけではないのでしょうけれども、出席したいというのは全市で5割から6割ということなのですよ。継続はしたほうが良いと思いますけれども、そういった実情みたいなものも把握されながら、課題として考えられているのだなと感じます。

また、細かい話で、これは今後ということではいいかなと思いますけれども、できる限り割合で示したほうがいいかなと思っています。5ページはすごくいいかなと思います。また、全体の回答者数が何人か入っていただければいいかなという気がします。回答者数が何人いて、何%かとするということ。何%かで見られると分かりやすいですし、市民に情報提供する際にも、基本、割合で示すべきだと思います。

例えば、1ページです。

言葉遣いもそうで、回答者属性とあって、右は回答数になっているのです。回答ツールや回答方法もそうで、これらは有効回答率にしてはどうかと思いました。

また、2つ目の79%は、母数が分からないですけれども、配付した対象者のうち79%ですかね。下のオンラインのほうは対象人口のうち、何%ということでしょうか。ここは有効回答率ではなく、普通の回答率になるのかもしれませんが、ただ、一つ一つの言葉は正確にということです。

そして、できる限り割合にすべきだということです。合計は数でいいと思いますが、その内訳は割合であったほうが良いと思います。男女比はどうか、全体のうち、328件のGoogleフォームが何%なのかも見えるかと思うのです。

次のページの縦棒グラフですが、これは円グラフにするのが正解かなと思います。事務局としては内訳を見せたかったのでしょう。ただ、そうなると思ふかなという気がします。とはいえ、今のままでいいのかもしれませんが。

3ページは、多分横棒グラフかなと思います。これは趣味の域だと言われるかもしれませんが、見やすさの意味では横棒グラフが望ましいということです。

最後に、10ページです。これは違うなと思ったのは19歳以下と20歳以上に分けられているところです。例えば、会場は各区の開催を希望というのは、19歳以下と70歳以上ということですよ。でも、20歳以上のスタンスは、各区と合同が同程度となっていて、これは、多分、30代から50代というものもあるので、細かく見るとちょっと違うような気がします。

財政のところもちょっと違うなという気がします。つまり、19歳以下と20歳以上で分けるというところに若干の違和感があるということです。

○鈴木座長 今後の情報提供にも関わってきますので、表現方法などについては委員のご意見も伺いながら詰めていければと思っております。

全体を通してほかに何かございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○鈴木座長 それでは、次第の2番目になりますけれども、成人の日行事のあり方に関する議論の方針等について議論してまいりたいと思います。

それでは、事務局より資料のご説明をお願いいたします。

○事務局(寺川市民参加推進担当係長) 資料の11ページから13ページまでが該当のページとなります。

説明の前半は議論の概要、後半は具体的な議論の方法についてという構成です。

まず、11ページをご覧ください。

今後、実施予定であります市民を交えた議論の実施方針と概要の案についてご説明させていただきます。

議論を行う目的といたしましては、これまでも会議の中で確認をしてまいりましたとおり、成人式のあり方に関して一定の方向性を出すことと併せて、サイレントマジョリティーの掘り起こしや参加された方の意識の変化を検証するということです。その上で、資料左上の議論の実施方針についてですが、前段で行いましたアンケート調査の結果を踏まえ、方針を立てたものになります。

さきにご覧をいただきましたとおり、アンケートに協力した理由として、市に意見を伝える機会が普段はないとお答えになった方が全体で2番目に多いという結果になっております。また、行政や地域だけではなく、市民を交えて議論を行っていく方針に関しまして、調査の結果では5割から6割の方に賛同をいただいているという状況です。さらに、こういった議論の場にぜひ参加したい、都合が合えば参加したいとお答えをいただいた割合は、年代にもよるのですけれども、3割から4割でして、年代で比較すると、若い方ほど参加したいという意向が強い傾向にあるということが分かっております。

これらのことから、方針といたしましては、ふだん市に対して意見を言う機会のない方にとって、参加の後押しとなるよう、無作為抽出という手段によって呼びかけを行いたいと考えております。多くの方のご参加につなげることができれば、サイレントマジョリティーを含む様々な属性の方から意見を頂戴することになるものと考えております。

また、市民が議論するに当たっては、情報提供の方法に十分に留意する必要があると考えておりますので、成人式の課題、それから、市としての検討過程を含め、正確な情報を共有した上で実施するということが柱の一つとしたいと考えております。

これに関連をしまして、左下の情報提供の考え方についてです。

会議の趣旨や成人式の置かれている状況などの総論のほかに、実施主体、財政、会場という論点を設定させていただきまして、これらに関して、バランスよく正確な情報をお伝えるためには情報提供する参考人の人選を丁寧に行う必要があると考えておりますので、しっかりと検討したいと考えております。

なお、当日の情報提供に当たりましては、あらかじめ撮影したものを放映するというよ

うな形式も含めて検討をさせていただきたいと思っております。

続いて、資料の右側の議論の開催概要（案）です。

まず、日時ですが、2日間を予定しておりまして、10月27日の日曜日、そして、祝日になりますが、11月4日の2日間を押さえたいと思っております。時間は、いずれも9時半から5時の想定です。

この2日間をどのように使うかに関しましては後ほどご説明させていただきたいと思いますが、同じ内容のことを2回行うのではなく、別々の内容で実施する試みにしたいと考えております。

次に、会場ですが、札幌グランドホテルの地下1階のクリスタルホールを確保しております。住所は北1条西4丁目で、地下歩行空間に直結をしておりまして、地下鉄からのアクセスもよい立地です。

次に、参加者の募集方法です。

住民基本台帳から無作為抽出し、申込書を送付することを考えております。

対象は、市の人口構成を考慮して抽出した市民3,000人です。そして、これに加えまして、さきに行った19歳のアンケートの対象者3,000人を加え、延べ6,000人に申込書をお送りしたいと考えております。この申込書には、議論する目的を分かりやすくお伝えするためのチラシとアンケート調査結果を同封したいと考えております。

なお、19歳の方へのアンケート調査結果によりますと、アンケート結果や議論の結果を知らせてほしいとお答えになった方が5割程度となっております。しっかりと結果をお知らせする必要があると考えているところであります。

それから、参加可能な日程であれば、両日とも申込みが可能としたいと思っております。すけれども、各開催日には別の方にご参加をいただきたいと考えております。

また、謝礼に関しては、1日拘束されるということのほか、昼食代や交通費も考慮し、1万円に設定したいと考えております。

なお、チラシの案ですが、委員の皆様には机上に参考に配付をさせていただいております。オレンジ色がかかったチラシになっております。

まだ案の段階ですので、内容的に不十分な面はあります。タイトルも仮称ですが、未来の成人式を考える市民会議とし、周知することを検討しております。会議の名称などについてもご意見などを頂戴できれば幸いです。

次に、会議の公正性の確保です。

バランスの取れた、そして、公正な議論を行う必要があると認識しておりまして、議論の手法やプロセスに関しては市民自治推進会議に監視をしていただくという位置づけにしたいと考えております。

今回、事務局は市民自治推進室に置かざるを得ませんが、会議の運営、実施は委託を検討しておりまして、ファシリテーターも確保したいという方針です。

最後に、今後のスケジュールですが、本日、大枠についてご了解をいただきましたら、

9月上旬に参加依頼を発送し、また、応募が多ければ、さらに抽選を行いまして、10月上旬に参加者を決定することを想定しております。

経過については次回の会議でご報告させていただきますとともに、ホームページでも公表し、プロセスの透明性の確保に努めたいと考えております。

次に、12ページをご覧ください。

具体的な実施内容についてご説明をさせていただきます。

先ほど申し上げましたとおり、2日間、日程と会場を確保しております。今回は、同じ内容を2回行って、それを検証するというのではなく、1回目と2回目でできれば別々の内容で実施し、結果を比較するという試みをご提案させていただければと存じます。

なお、本日、仮に、方向性について特段のご異論がなければ、大枠について承認していただいたという扱いで事務を進めさせていただければと考えております。

実施内容の細部につきましては今後詰めていく中で変更、修正が可能であると考えておりますので、会議外でも実施内容案を共有するなど、ご報告は随時させていただければと考えております。本日以降も継続してご助言やご指摘などを頂戴できれば幸いです。

さて、資料についてですけれども、1回目ですが、イメージとして、市の縮図をつくって議論をするミニ・パブリックスの手法を用いたいと考えております。

資料の上部の議論の目的と流れをご覧ください。

まず、一つ目ですけれども、無作為抽出の市民40人により議論を実施し、ファシリテーターが合意形成を支援するという形を想定しております。

それから、二つ目ですけれども、参加者は応募者の中から性別や年齢などのバランスを考慮して選定するとしております。

これに関しまして、参加者の性別・年齢構成例という下部の表をご覧ください。

左側の表に関しましては、参加者40人を札幌市の人口構成を考慮して配分したものになります。特徴といたしましては、10代、20代がほかの世代と比べると少ないということが挙げられます。これが会議全体の参加者になりますが、テーブルごと、6グループに配分した結果が右側の表になります。1テーブルに6人から7人となっておりまして、10代から20代についてはグループにほぼ1人となります。

そして、属性に関しましては、性別や年齢のほかにも、例えば、職業や市内出身なのかどうかでもできればお答えをいただきたいなと考えております。もしこれは聞いておいたほうがいいのではないかと思われる属性があれば教えていただけますと幸いです。

資料の上部に戻りまして、3つ目です。

論点に関して、投票（評価）を行い、結果を市の策案及び今後のさらなる議論に活用してまいりたいと考えております。

投票に関しては、例えば、各論点に関することを中心として、5段階あるいは7段階で点数をつけてもらうことを想定しております。そのほか、可能であれば、各グループから出されたアイデアを一覧化して投票してもらうというようなイメージも持っています。

ファシリテーターの方に合意形成をどのように支援してもらおうかですが、最終的な投票の方法をどのように行うのかに影響されるものと認識しておりまして、この点は、今後、細部を詰めながら考えてまいりたいと思います。

最後に、4つ目ですが、市政課題に関して一般市民が熟議する機会を得た場合の意識の変容を調査し、手法に関する評価も併せて実施することを考えております。

次に、流れについて、中段の図でご説明をさせていただきます。

まず、議論の前に意見調査を行いまして、次に情報提供に移ります。その後、グループに分かれ、最初の議論を行っていただきます。続いて、全体会議、質疑の時間を設けまして、グループで話し合っていた中で生じた疑問のほか、もう少し説明が聞きたいということがあれば、行政の側から可能な範囲で情報提供をさせていただく時間にしたいと考えています。この全体会議の結果を踏まえ、グループで改めて2回目の議論を行っていただき、最終的にグループごとに議論した結果を発表していただきたいと考えています。最後には、議論後の意見調査を実施するのと併せ、今回の手法に対する評価を行っていただきまして、結果は、さらなる議論、それから、行政として策案していくことに活用していきたいということです。

これが、1日目の案です。

次に、ページをおめぐりいただきまして、13ページをご覧ください。

2回目のイメージは、参加者の年代ごとの人数が一定となるように考慮して議論するというオリジナルの方法のご提案となります。

1回目との違いは、市の縮図をつくった場合、若い方が少ないことなどで生じる年代ごとの人数の差を埋めること、それから、年代ごとに分けて議論をした後、各世代が交じって議論をしてみるという試みであります。

加えて、1回目と比べまして、特に若い方は、年齢の近い参加者同士が話し合ったほうが自分の意見を出しやすいのではないかとということ、それから、その後、各年代が交じって議論した場合において世代ごとに話し合った意見を持って臨めば、仮に自分に明確な考え方がなかったとしても、自分と近い世代間で話し合った意見を伝えられるのではないかとということでそのようにしたいと考えております。

資料の上部の議論の目的と流れについて4点記載しております。

一つ目は、先ほどと同じです。

無作為抽出の市民40人により議論を実施し、ファシリテーターが合意形成を支援します。

二つ目も同様ですけれども、参加者の性別・年齢構成例は、下段に記載してあるとおりです。

左側の表の数字は、年代ごとの人数を一定になるようにそろえたもので、合計で7テーブル、それぞれ5人から6人としています。年代ごとに分けて議論する場合はこの人数配分になります。

それから、右の表は年代を交ぜてみた場合で、6テーブル、それぞれ6人から7人にし



た場合で、1テーブルについて、年代で見ると、10代から20代が2人、30代から40代が2人、50代以上が3人程度という配分になります。

上部に戻っていただきまして、3つ目ですが、年代ごとの意見の把握を試みるとともに、論点に関して投票（評価）を行い、結果を市の策案及び今後のさらなる議論に活用するという事です。

最後は、市政課題に関して一般市民が年代ごとに熟議する機会などを得た場合の意識の変容を調査し、手法に関する評価も実施したいという考えです。

流れにつきましては、中段の図でご説明をさせていただきます。

まず、議論の前に意見調査し、次に情報提供を行うという流れは一緒です。その後、年代ごとにグループに別れ、最初の議論を行っていただき、結果をグループごとに発表していただきたいと思っています。続いて、全体会議、質疑の時間を設け、グループで話し合っていた中で生じた疑問や行政側からの情報提供、それから、逆に、発表をいただいた内容に関して、行政として何か見解があればお伝えをする時間を持ちます。そして、全体会議の結果を踏まえまして、今度は年代が交じったグループで2回目の議論を行っていただき、グループごとに議論した結果を発表します。

最後に、議論の後の意見調査と手法に対する評価を行っていただき、その後、結果を活用するという案です。

○鈴木座長 ただいま具体的な成人の日の行事のあり方に関する議論の方針等についてご説明をいただきました。非常に分かりやすくまとめられまして、案として提示していただいたことに感謝申し上げます。

今回の特徴としましては、2回の開催に関しまして、同じ方法ではなく、それぞれ特徴を持たせ、別の方法で行うという案だったかと思います。そうした特徴も含め、何かご意見等がございましたらお願いいたします。

○梶井委員 1回目と2回目を違うやり方でやること、そして、2回目に関しては前半と後半でグループの構成も変えてやってみるということですよ。すごくいろいろと試されようとしていて、私はわくわくしています。

あとはファシリテーターの方の力量をどれだけ担保できるかが重要だなと思いました。

○鈴木座長 そのほかにかがでしょうか。

ミニ・パブリックスということも出ましたけれども、山崎委員、いかがでしょうか。

○山崎委員 市民の意向をどう表出させるかということはこれでできるでしょうね。ただ、これもどこまで時間をかければいいのかです。私にも明確な定まった意見はないのですけれども、どのぐらい時間をかけると熟議と言っていいのかですね。

日曜日は午前と午後の丸1日で、これを熟議と言っていいのか、あるいは、何回も、何日もすることを言うのかです。例えば、10月と11月と同じ40人を呼んで2日かけてやってこそ熟議なのか、あるいは、この前に予習の時間を設けるのか、どのぐらいやれば熟議なのかということなんです。

今、手元にあるミニ・パブリックスの本を見ているのですが、いわゆる討論型世論調査というようなものであるとそんなに時間をかけないで、1. 何日となっていますけれども、政策提言ぐらいまで持っていくとなると十何日やっているようなものもあるわけです。

私は十何日もやるべきだと申し上げているのではなく、どのぐらいをもって熟議と言えればいいのか否かで、私もまだ定まっていなくても、考えるところがあるということです。

○事務局（川村市民自治推進課長） それは事務局の中でも議論が結構あったところです。

成人式に関しては、先ほどのアンケート結果等でお伝えしたとおり、論点が3つぐらいに絞られるのかなと思っております。また、成人式というのは全く知らないものではないので、ある程度の予備知識的なものもあるのかなと考えています。そういうことも踏まえますと、1日と長いですがけれども、朝から晩までやれば一定の方向性が出るのではないかなということでこのように設定しました。

山崎委員がおっしゃったように、最後、やったことに対してのどうだったという評価もいただくので、その中で時間が足りなかったな、別日にもう一回やってほしかったなという意見があれば、成功だったのか、事務局の読みと違ったのかを判断したいなと考えていました。

○山崎委員 もう一つです。

無作為抽出をやる時、区域についても湧けてバランスを取ることがあるわけですが、そこはどうなのでしょう。札幌市には10区あるわけですが、区ごとに差異が出てくると予想されているのかです。今回の大学生その他へのアンケートも含めてのことです。年齢と性別で差異は出るのでしょうか、居住区域はどうかと思います。

なお、専門的なことから言うと、社会階層みたいなものを織り込んで調べるということもあるようです。今回はそこまではしなくてもいいのかなと思いますが、どこに住んでいるかで変わるのか、事務局がご検討されていることがあったらコメントをいただければありがたいです。

○鈴木座長 以前、区によってということが出ていましたし、先ほどのご説明でも、例えば、職業や札幌出身かという話もありましたけれども、事務局のご見解といたしますか、考えていることについてお願いします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 私どもの部署で無作為抽出をする場合、年齢や性別もそうですし、地域も当然考慮に入れております。

今回、一般市民3,000人という考え方は、市の縮図をつくってみたいということ、それは、地域ごとのバランスまで見たいということからです。

職業に関しましては、申込みがあった方に対し、そういう問いかけをすれば、ご職業に応じて抽選をかけるということは可能であると考えております。

○鈴木座長 梶井委員、よろしく願いいたします。

○梶井委員 今のことについてですが、無作為抽出は市民3,000人と19歳のアンケート対象

者で、計6,000人ということですね。6,000人の中から80人を選ぶということですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） はい。

○梶井委員 80人を選ぶのも意外と大変ですね。いや、結構来ると思うのです。託児もあるわけですから、子育て中の方でも、議論にも参加してみよう、自分の子どもが20歳になったときのためにということもあるでしょう。そういうことから結構たくさんの方が申し込んで来られるかもしれないなと思いました。

○鈴木座長 託児もそうですし、支払いにつきましてもよいきっかけになるかなと思います。

ただいま出ました属性に関し、例えば、こういうものも取ったほうがいいということはありませんか。取れる、取れないはあるのですけれども、何かご意見がございましたらお願いいたします。

○三上委員 属性についてですが、出身地を取ったほうがいいのかどうかはありますし、成人式への参加経験でも意見の違いが出るかなと思いました。また、担い手の人が選ばれる可能性もあるのですよね。それから、多様性の視点をどうするかです。無作為だから多様性は別にいいのですかね。例えば、ハンディキャップのあるなしをどう捉えるかです。そういう方の視点も入れ、各区でやれば、自分の自宅から近いから参加しやすい、親が連れていってくれる可能性が高いなど、そういうこともあるかもしれません。

そういう視点も持って議論をしてもらおうということで多様な視点を入れるという可能性もありますし、自分がどうであるか、参加者自身がどういう立場で意見を言うかについても配慮したほうがいいのかなと思いました。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんか。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 1回目も2回目も論点に関して投票を行うとなっているのですが、投票を行うタイミングは最後ですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） はい。

○オブザーバー（斎藤広報部長） それぞれグループで議論し、発表するというプロセスを経て投票に至ると思うのですけれども、発表というか、グループの討論のやり方だと思うのですけれども、このときにグループとしての結論を出させるのかで最後の投票にも影響が出てくるのかなと思ったのです。

6人なり7人なり、非常に少ない人数ですけれども、その中でもサイレントマジョリティーとノイジーマイノリティーが分かれてくると思うのです。本当のサイレントマジョリティーの人が引っ張られ、グループの結論が出たとき、それが自分の意見なのではないかという誤認を、誤認という言い方は変かもしれないですけれども、そうして結果が引っ張られてくる可能性もあるなと思ったのです。

どちらがいいか、私には分からないのですけれども、グループとしての結論を出した上で、ほかのグループの意見も聞くとやらせるのか、あるいは、グループとしてこういう意見が出ましたということの一つのまとめにするのか、そのやり方はちょっと考えたほうが

いいのかなと思いました。

○事務局（川村市民自治推進課長） 詳細についてはこれからもうちょっと考えたいなと思っています。

○鈴木座長 片山委員、よろしくお願いいたします。

○片山委員 私は議論を見失っているかもしれないのですが、どのような情報をどのように与えたらサイレントマジョリティーが参加するか、口を開いてくれるかの論点はどのように検討しようとしているのですか。

どのような情報をどのように与えたらサイレントマジョリティーが参加してくれたり、口を開いてくれたりするかというそもそもの問いに対し、ここではどのように検討しようとしているのかということです。

○事務局（川村市民自治推進課長） まず、アンケートを取った19歳の方がいますが、回答してくれた人にも回答してくれなかった人にも送ります。そして、アンケートにも回答しなかったけれども、何か、アンケート結果も送ってくれたし、今、こういうことを進めているのだ、今までは考えていなかったけれども、議論に参加してみようかななんて思う人がもし応募してきたらサイレントマジョリティーの掘り起こしに成功したのかなと言えるのかなと考えています。

そして、無作為の3,000人についても、アンケートに答えたかどうかと聞くか、そこはまだ決めていないですけれども、そこも工夫しないと駄目かなと、今、片山委員に指摘されて思いました。

○片山委員 たしか、3か月ぐらい前にオンラインで会議の事前打合せをしたとき、募集する際は、事前アンケート調査の結果を与えない群、与える群に分けるなど、与える情報自体を変えて、統制群をつくって、その人たちがどのぐらい参加したいと言ってくるかのテストも何千人に送るのだったらできるかもねという話をしていたと思うのです。

アンケート調査のときに送った対象がもう分かっている、その人たちに再度送れるのだったら、情報の与え方といたしますか、回答した人としない人で分かるかもしれないですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 以前、片山委員と打合せをする機会があったときにお話ししたのは、議論の後の2回目のアンケート調査を行うことに関してだったと思います。ですから、議論のときに情報を与える、与えないという話はまだしたことがありません。

議論をした後に、また同じ3,000人の19歳の方に、計3回目お送りすることになってしまいうのですけれども、その方々に送り、別の19歳の3,000人のグループに何の情報も与えないで送る、そうした検討は必要ということは考えていました。

○片山委員 すみません、スケジューリングが私の頭から抜けていました。

○鈴木座長 梶井委員、よろしくお願いいたします。

○梶井委員 今の片山委員のご意見にちょっと関連するかもしれませんが、19歳の

アンケート対象者3,000人に送り、無作為抽出された3,000人の方にも送るのですよね。でも、10代で選ばれる人はこの2日間で合わせて8人です。

つまり、無作為抽出のプラス3,000人もいるけれども、その中から8人ですので、相当な倍率になります。19歳の人たちといますか、これから成人式を迎える一番の当事者に近い方々が8人というのはちょっともったいないなという感じがします。

人口構成を考慮しますとどうしても10代は少なくなってしまうのですけれども、たくさん募集するわけですから、プラスアルファ考えられてもいいのかなという感じがします。  
○鈴木座長 ミニ・パブリックスのほか、今回、オリジナル案と出ていますけれども、場合によってはアンケートのときに参加意識を聞いて、場合によってはもう一回ぐらい別というようなイメージもあるのでしょうか。

○事務局（川村市民自治推進課長） そうですね。確かに8人以上は来るだろうとは思っていますので、もったいないのですけれども、先ほど言ったように、こういう言い方もちょっと失礼なのですけれども、その中からの2段階選抜となるのです。例えば、働いている方なのか、学生なのか、もともと札幌市に住んでいる人なのか、途中から来た人なのかなど、そういうことも考慮しながら、19歳の中にもいろいろな層の方を選抜したいなどと考えていました。

○鈴木座長 確かにもったいないというのはあるかと思えますけれども、どれぐらいの方から応募をいただけるのか、それも含めて今後の仕組みの中で生かしていくものかなと私も思っています。

そのほかにいかがでしょうか。

○大村委員 1点質問です。

13ページのオリジナル案で、「各年代の参加者を一定にし、関係者を交えて課題の問い直し」とあります。この関係者を交えてというところがオリジナル案のほうにのみある表現だと思うのですけれども、ここについての説明をお願いしたいです。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） ここに関しては私からの説明が漏れていたところ です。申し訳ございませんでした。

2回目に関しては、会場にぜひ地域の方にもお越しをいただきたいと考えています。ただ、その方々に実際に議論に加わっていただくということまでは恐らく難しいのではないかと考えております。議論に与える影響が計り知れないからです。一方で、あくまで地域の方を代表する意見として質疑に応じていただくなど、そうした仕掛けが考えられればなというイメージを持っております。

いずれにしても、人数は限られると思うのですけれども、会場にお越しをいただくということを想定しているということです。

○鈴木座長 そのほかにいかがでしょうか。

○山崎委員 参加してくれる方に膨大な情報を何でも投入するわけにはいかないですよね。そうすると、ある程度のポイントになるといいますか、これで考えてほしい、受けてほし

いという選別といいますか、選択があるわけではないですか。そこをどう設定するかで議論が分かりますよね。

今までの議論で面白かったのは、やっぱり、各区ではボランティアベースで、目に見えないところで人知れず頑張ってくれている人たちがいるということです。でも、そういった人たちのボランティア的な活動がだんだん厳しくなっているのですということです。

あるいは、お金なのでしょうか、そうしたことをどう投げかけるか、訴えるかで、端的で客観的な情報提供なんていうのはあり得ませんし、それでやると何でもかんでもみたくなってしまうから、それらをどう絞り込んでいくのか、設定していくのかですね。

僕も、では、こういった情報がいいよとはにわかには申し上げられないのですけれども、そこをどう絞るかも大きな一工夫しなければいけない論点ではありますよねという問題提起でした。

○鈴木座長 確かに、おっしゃるとおりですよ。私も、情報提供の内容が一番の課題かなと思っていました。授業もそうなのですが、多過ぎても聞き逃してしまうでしょう。また、情報提供の仕方ですね。山崎委員がおっしゃるように、ポイントをどこに絞るのか、そこがやっぱり課題になってくるかなと思ってます。

また、これは放映されるということでしたので、それで公平性が保てるのかなと思ってます。

梶井委員、よろしくお願ひします。

○梶井委員 1回目と2回目の情報提供は違うものなのですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 同じようにしたいと考えています。

補足ですが、情報提供の方法というのはやっぱりバランスが大事だということは事務局としても認識をしております。ただ、どこまでそのバランスが取れるかは、お話をさせていただき参考人の方にご了解をいただけるかもあります。

ただ、今回の場合は、事前に地域の方々と接点を持って、こういうお立場でご発言されるなどというのはある程度分かっているという下ごしらえをしてきたところがありますので、議事録などを見ながら、例えば、合同開催を強く推す方、あるいは、地域でぜひやりたいとおっしゃっている方、あるいは、札幌ドームでぜひやってほしいというようなお声がある場合には、アイデアですけれども、札幌市の中の札幌ドームの担当部署の者にも話をしてもらいなどもあるかと思っています。

しかし、アピールがすごいと、札幌ドームでやるのがいいねとなってしまう可能性といえますか、危険性はあるのですけれども、そうしたバランスも十分に考慮しながら人選したいと考えています。

○鈴木座長 野田委員、いかがでしょうか。

○野田委員 すごく面白いなと思いながら聞いていました。アカデミックな観点からは実験室実験という言い方をするのですけれども、お金もかけながら、結構大規模にやられるので、非常に面白いなと思って聞いていました。

1回目と2回目、それぞれ前後で調査をやるのですよね。まず、最初に意向調査1をや  
って、いろいろと議論した後に意向調査2をやるということで、変化みたいなもの、学習  
効果みたいなものがあるのかを見るということだと思っております。結局、変化はなかったと  
いいますか、もともと自分が思っていることで、いろいろな議論をしたけれども、それが  
一緒だったということもあるのでしょうかけれども、学習するという効果が1回目も2回目  
もあるということですよ。

そして、1回目と2回目の差を見ようとしているということなのですよ。1回目のほう  
は、市民の縮図をつくって、年齢別は関係なく、本当に縮図としてまずやってみるとい  
うことで、途中で同じような情報をもらって、もう一回議論してということですよ。で  
も、2回目のオリジナル案のほうは、年代別に議論をしてもらって、年代別だからしゃべり  
やすい感じになることを想定し、その後、情報をもらって、その後年代を混成して議論  
をするので、年代別でまとめたような議論の仕方の最初にやったパターンが2回目になる  
ということですよ。

ですから、1回目と2回目の差を見る、ここに差がなかったらあまり関係ないと思うの  
ですけれども、もしも差があった場合は、どちらがいいかという判断なのですよけれども、  
普通はいっぱい意見が出たらいいような気がしますので、2回目のほうがたくさんの意見  
が出たよということも書き留めていただきながら1回目と2回目の差が出ると面白いなど  
思いました。

そして、1回目と2回目で参加する人が別々なのですよ。1回目と2回目の差を見る  
ときに同じ人が同じ条件でということであれば非常にいいのですけれども、年齢と性別だ  
けが一緒なのです。それ以外では、例えば、地域に対する思いが割と強い人は区ごとに  
というような意見を言いやすいかなと想像をしています。

逆に言うと、東京志向のような人は、区ごとではなく、全体みたいな、そんな思いを持  
つのかなという気がしますけれども、そこはコントロールしにくいのですよね。ランダム  
に集めているから、大体同じぐらい入っているだろうということ考えるしかないのかな  
という気がします。

本当は、1回目も2回目も、地域への思いが強い人もいて、2回目も同じぐらいいると、  
細かく言うと、政党に対する党派性といいますか、所得や職業が違うということもあるの  
ですけれども、そこまでお金をかけられないのですよね。募集するとき、そういったこと  
も踏まえて聞ければいいのでしょうか。なかなか難しいと思うのですが、アンケートではそ  
ういうものを取っておいたほうがいいのかという気がしました。そうした差があるから  
こういう差が出たという分析ができると思います。

○鈴木座長 確かに、地域への思いが出てくる可能性は結構ありますよね。

梶井委員、お願いします。

○梶井委員 今、野田委員がおっしゃったように、議論前の意見調査のときに地域への愛  
着度というものもアンケート風に入れ込むことはできるかもしれませんよね。年齢を書く

欄と同じように、愛着を持っていますかという問いをつくり、持っています、とても持っている、まあ持っているという感じにできるかもしれませんね。

○鈴木座長 ある意味の尺度を持って判断するというのはよろしいのかもしれませんが。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今のご意見を踏まえ、申込書を送るときの問い方について工夫したいなと思いました。

○鈴木座長 本日は、先ほど事務局より話がございましたように、大枠を承認していただけるかということですが、これまでの皆さんのお話を伺っていると、特徴を持った2回の開催についてご賛同を得られたのかなと感じておりますけれども、大枠に関してはいかがでしょうか。

○事務局（神市民自治推進室長） 先ほど大村委員からも話があった2回目の関係者を交えてということについてです。

当初からテーブルに関係者を入れてはどうかということがあったのですが、先ほどの説明では、2回目は、テーブルには入らないけれども、関係者が会場にいるというイメージですし、場合によっては質問があれば回答をするかもしれないということでした。内部でもそれについてはまだ煮詰めていないのですが、そういうことであれば1回目も同じようにしたほうが良いと思いました。2回目だけに関係者を入れるというよりは1回目も同じようにしたほうが良いのではないですか。

○鈴木座長 野田委員、では、お願いします。

○野田委員 関係者についてはできれば両方とも入らないほうが良いかなと思っています。要するに、2回目では年齢別にして話しやすさみたいなものが影響するかをもし見るのであれば、そちらだけに関係者がいるのはよくないので、関係者は入れないとするか、もしくは、両方とも入れるということですね。でも、両方とも入れるとなると、関係者の効果を見るみたいな感じになると思うのですが、どういう関係者なのか。

○事務局（前田市民文化局長） 補足させていただきます。

実は資料にはないのですが、関係者も入って議論したらどうかというアイデアも事務局内ではあったのです。ところが、いろいろと話をしているとき、経験のある関係者が入ると、どうしても実体験に基づいたお話は非常に力があるので、結局、そちらに引っ張られるのではないだろうかという議論になったのです。それで、今回、関係者の方には議論に入らないでもらおうということにしました。

その一方で、先ほどもお話があったのですが、地域の皆さんのいろいろな活動や日頃の思いなども事務局として事前に聞いてきたものですから、参加した人たちにそれを知っていただくなり伝えるなりということも必要ではないだろうかという議論もあって、非常に迷いました。それもあって、今、このような中途半端なご提案と事務局内でのお互いの確認のし合いをしているという状況になっております。

よろしければ委員の皆様にもこのあたりのことについてのお考えを伺えたら大変ありがたいと思いますので、よろしくお願いします。



○鈴木座長 野田委員、お願いします。

○野田委員 アカデミックの論文の中にもそういう実験があつて、専門家が入って議論した場合、入らない場合というものがあるのですね。専門家というのは今回でいけば関係者で、要は経験がある人が入った場合と入っていない場合の差を見るということだったらいと思うのですけれども、年齢別の話もあるので、クロスになってしまって何の効果かが分からなくなるかと思ひます。ですから、もし関係者の話に注目されるのであれば、条件は一緒にしたほうがいいのかなどという気がしひます。そして、年齢別の効果を見たいのであれば、関係者は両方とも入れないほうがいいのかなどと思ひます。

○事務局（前田市民文化局長） もし、ほかの委員の方で違つたご意見がないようであれば、そのことを承りまして、事務局としてどうするかを考えたいと思ひます。

○鈴木座長 梶井委員、お願いします。

○梶井委員 特にオリジナル案のほうには関係者はいらっしやらないほうがいいのかなど私は思ひます。

もう一つですが、関係者というのは参考人にはならないのですか。

○事務局（前田市民文化局長） なります。

○梶井委員 そうしたら、情報提供のところの参考人にバランスよく配置すればいいのかなどと思ひます。

○事務局（川村市民自治推進課長） 関係者は、資料の真ん中の全体会議・質疑のところ、1回目の話し合つた結果でもっと聞いてみたいことの役割があります。ここには行政の説明と書いてはひますけれども、地域に聞いてみたいことのところで携われなひかという想定はしておりました。

○鈴木座長 見学の趣旨もあるわけですよね。

○事務局（川村市民自治推進課長） もちろん、見学の趣旨もあります。

アンケートの結果と自分たちへのヒアリングを踏まえ、こういう議論がなされているという、直接的な立場ではない人から見たらこういうふうに見えるのだなということもあると思ひます。そして、こういう議論がされたのだという結果を地域に持ち帰り、考え直すきっかけにしてもらいたいということもあります。ですから、会場には来ていただきたいなというのが正直なところではひす。

○鈴木座長 見学、そして、ここで言う参考人、そして、質問があつたときに答えるということですね。でも、グループでの議論には参加しないということではひろしいですか。

○三上委員 私も同じ意見ではひす。

ただ、参考人という響きがあまりにダイレクト過ぎて、何かかわいそうだなという気がしひます。呼び方としては、情報提供者というようなことではひどうでしょうか。

やっぱり、情報提供者が議論に入ると、多分、ファシリテーターが大変なことになると思ひます。それが70代の担い手だと特にすごいことになると思ひます。（経験が豊富なために、強く思ひを述べる時間が比較的多いという観点から、参加者がその思ひに流されや

すくなるという意味)

そして、情報提供をするときもバイアスがあまりかからないよう、正確な現状をお伝えする、そして、思いをどう伝えるかについて事前に打合せをしたほうがいいかなとは思っています。

○鈴木座長 皆さんに趣旨は分かっていたかと思います。

私も参考人という言い方はちょっとどうかなと思っていました。やはり、情報提供者だと思います。また、ファシリテーターの質といいますか、バランスといいますか、同等ではありませんと、テーブルごとでファシリテーターの力量によって差が結構出てきてしまうと思います。完璧に同質にするのは難しいかと思いますが、事前のブリーフィングといいますか、最低限守っていただきたいことを情報共有しながら進めていかないとまずいかなと思いますので、その工夫といいますか、事前に説明するのか、ブリーフィングの機会を設けるのかをしていただければと思います。

また、最低限、こういうことは守ってほしいということについても確認させていただきながら進めればいかなと思いました。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今日、大枠を承認していただけたら、先ほども申し上げましたけれども、当日の進め方についてはみっちり考えたいと思っています。

その検討の案といいますか、こういう考えでいるということは委員の皆様にもメール等で共有しながら進めてまいりますので、その都度、ここはこうしたほうがいいのかというご意見を頂戴しながら組み立てていきたいと思っています。

よろしくをお願いします。

○鈴木座長 ファシリテートについては三上委員が専門ですので、ぜひいろいろとご意見をいただければと思います。

○三上委員 本当に質が問われますね。今回は実験的なもので、これ自体がどんなにチャレンジングなものかとか、どういう趣旨なのかということをやちゃんと分かった上でやるのが第一ですね。その上で決して誘導しないということです。その質を最低限担保するということかと思っています。

また、力量の話でいくと発表方法もあります。もしかするとファシリテーターに発表をお任せするとしますとファシリテーターの力量といいますか、スキルの差が出てしまう可能性があるのですが、今どきで言うと、グラフィックといいますか、絵が描けるとすごくやった感が出ますし、付箋のカラーをたくさん出すとすごい充実感が出るのです。ただ、発表を聞いていると、何だかなというものもあるので、そういう形だけに陥らないような会議にしたほうがいいのかと思っています。

実はこういうものに出たいという人やワークショップが得意な人もいて、ワークショップへの参加率が高い人が結構来る可能性もあって、そうすると、その人がさくさく仕切ってしまうといいますか、ファシリテーター以上に市民が仕切るということも経験上ではあります。

そして、ファシリテーターは市民の意見を大事にしてしまうから、仕切り屋の市民に対してあまり物を言えなくなってしまう可能性があるのですが、そこは全体のメインファシリテーターがしっかり見ていくということですね。

また、先ほども出ましたけれども、事前の打合せはかなり大事だと思います。それが事務局と我々の役割ですね。資料では監視と書いてあって、その言葉もちょっと気になっていたのですが、監視や参考人とするとは大変な人間関係になりそうだなと思いました。でも、今回のチャレンジなものへの実施体制です。今までと違うことをやるということの体制で、今回、テストしてみて、我々自身がどうだったのかも評価しなければいけないと思います。

その上でのファシリテーターの評価で、ファシリテーターがどのぐらい影響を与えたのかです。1回目と2回目があり、先ほど評価のアンケートをすると出ていましたが、振り返りという感じで、それぞれの参加者がどう自己成長につながったかを引き出すアンケートといいますか、振り返りシートにすること、そして、ファシリテーターの質についても問うということはやったほうがいいと思います。ファシリテーターもそういうことが評価されるよというプレッシャーをちゃんと受けた上でやったほうがいいのかなと感じました。

○鈴木座長 事前の調査でワークショップへの参加経験を聞いてもいいですね。聞き方は難しいかもしれませんが、地域活動への参加経験みたいなこともある程度聞ければ、先ほどの地域の愛着にもつながると思いますので、そこもうまく考えたらいいかなと思います。

○三上委員 多分、その質問でサイレント度合いも分かるかもしれないですね。よく物を言う人たちなのかどうなのかです。

一番気になるのが10代や20代で、あまりにもそういうものに慣れている人が出てしまう班と全く経験のない人が出る班で分かれるかもしれませんが、それはそれで、そういうことで進めるしかないとは思いますが。

○鈴木座長 全体を通してほかにいかがでしょうか。

○片山委員 これはグランドホテルでやりますよね。市民自治の話をやるといったとき、シャンデリアがぶら下がっていて、円卓に白いテーブルクロスが敷かれ、お水なんか置いてあるような感じだとかなり緊張すると思うのです、そもそも、ここの会場だって分かった途端にそう感じると思います。

コミュニティデザインの有名な会社なんかは会場のポップの色をすごくカラフルにしたり、ロゴも親近感が湧くようなものにしたり、椅子のカバーを替えたり、会場設営に結構こだわるのです。そして、報道が入り、写真も撮られるわけで、市主催というかちかちの感じの写真になってもちょっとあれかなと思います。

今回、会場運営はコンサルに依頼するのですか。そういうことも含め、コンサルを選んだらいいかなと思いました。

○事務局（川村市民自治推進課長） グランドホテルの地下1階のクリスタルホールは、

企業の展示会などでも結構使っているところで、厳かなシャンデリアはないです。

なんちゃら審議会みたいな、そういう上階のフロアでやっているところとはちょっと毛色が違って、アットホームな感じでいけるかなとは思っていますけれども、参加者には変な緊張感をなるべく与えないような工夫はさせていただきたいと思います。

○鈴木座長 そのほかに何かございませんでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○鈴木座長 それでは、大枠については承認していただけますでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○鈴木座長 どうもありがとうございます。

2回の開催について、それぞれ特徴を持って進めてまいりますけれども、それについてもご承認をいただけますでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○鈴木座長 ありがとうございます。

最後に、チラシについてお気づきの点がございましたらよろしくお願ひいたします。

○梶井委員 すてきです。タイトルもいいと思います。

○鈴木座長 成人式がイメージできるデザインで結構すばらしいですね。

大村委員、いかがですか。

○大村委員 デザインのことではないのですが、定員のところについてです。両日に参加できないということが分からないかなと思ったので、そこが気になりました。

デザインについては、この後、メールで出せるのであれば協力したいです。

○鈴木座長 そのほかにいかがでしょうか。

○三上委員 事前チェックのときに気がついたことです。

このワークショップが楽しくなるかどうかにもよるのですが、未来の成人式を考えるのか、成人式の未来を考えるのかでニュアンスがちょっと変わるなと思いますし、参加者の参加意識も変わるかなと思いました。

三つの論点だけを議論するというワークショップになると結構殺伐としたといいますか、お金はどうしますか、何がいいですかねということや会場はどうしますか、個別がいいよ、やっぱりドームでしょうという話になるかもしれません。でも、最終的にどんな成人式であつたらいいのかということで、未来の成人式となると、19歳の人でも未来の成人式についてぶっ飛んだアイデアを出せるかなと思いました。未来の成人式というのは、自分の成人式ではないけれども、50年後を考えたらというイメージを持つと、宇宙でやろうとか、そういう楽しいことを考えられるワークショップだなと思って来ると思うのです。ところが、行ってみたら、課題がありまして、まずはそれを決めてもらわないと大変なのですよなとなったら困ると思うのです。

成人式の未来を考えるとすると、この後、成人式はどうあつたらいいのかという今の課題がインプットされ、フォアキャストといいますか、近い将来、どうなっていくのか、課

題はありながらも、こんな楽しい成人式のほうがいいよねという議論をすることにつながるかしれません。

このタイトルとリード文とといいますか、こんなことを話してもらいますという今回の会議の趣旨説明によって、参加者のみなさんが会議内容を想像して準備してくるわけで、ちょっとした言葉の使い方次第で、受け手のイメージも変わってくるかもしれないなと思いました。

○鈴木座長 一つの感想、アイデアということで承りました。

また、タイトルですね。将来の成人式もイメージしてもらいつつ、変えられるのだみたいなことも含めたものもいいですね。

○三上委員 やり方です。未来の成人式とするほうがわくわく感があっていいと思いますよ。でも、こんなこと（現実的な課題）もあって、考えてもらうとといいますか、実際にイメージできたほうがいいかなということです。アンケートのとき、あるいは、募集のときに情報提供も含めるのでしょうから、そういうこと（現実的な課題）も前提だなと分かるとは思いますが。

○事務局（川村市民自治推進課長） ただいま、いろいろとご意見をいただきましたが、このチラシに関してはまだたたき台ですので、今日の意見も反映し、もう一回練り直してからご提案させていただきます。

○鈴木座長 私からもリード文についてです。これは文字が詰まり過ぎていて、文字が多かなという印象を持ちました。スペースを広げるか、少しすっきりさせるのかはあるかと思いますがけれども、デザインのバランスです。私からも後で意見を出したいなと思いますので、よろしくお願いします。

ほかにございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 全体を通してほかございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 ありがとうございます。

### 3. 閉 会

○鈴木座長 それでは、いい時間となりましたので、以上をもちまして第6回第5次市民自治推進会議を終了させていただきます。

長きにわたりましてご議論をいただきまして、どうもありがとうございました。

以 上